

第88回 「防災」のなせるわざ

IT生

先日、助産師会の方々と話す機会があった。

助産の仕事は、「産婆さん」といわれていた古来から、お産の介助が仕事であるが、それだけではない。産前産後のケアから、困窮家庭にはお米をもって行って、子育て支援もやっていた。いわば、その地域で取りあげた子供の後見人であった。

現在もそれは変わらないが、近ごろの世相もあって、性教育の指南、性被害・DVからの保護なども職域の範囲だという。いわば、人間の生死（肉体的なというよりむしろ精神的な部分）にかかわる仕事だが、悩みは、近代医療（産婦人科）との相克である。

女性のライフサイクルを中心に考え自然であることを重んじる助産師と、近代医学をもって母体をコントロールしようとする医師とは相いれずはずもない。これは世界中どこでもそうらしいが、香川県助産師会はその相克を乗り越えつつある。



危機への対策のなかで行政や病院と関係性を高めた香川県助産師会

香川県では、助産師会が「災害時の母子保護」を前面にだし、医療機関を取り込んでしまったのである。防災の取り組みになると、おのずと行政が中心となる。そうすると、行政が助産師会と医療機関の仲介役をかってでる羽目になるわけだ。災害時の母子保護に反対する人は誰もいない。

災害時には、行政（県）が母子の避難情報を発信し、病院と助産師が連携して母子保護にあたる。それを実現するためには、日ごろから、助産師側と医療機関の連携が必要となる。連携維持のために、身軽な方の助産師会（病院で患者を待つ医師と違って助産師は母子のもとに駆けつけるのが仕事だから身軽なのである）が、積極的に動いて、ネットワークづくりや勉強会の開催、訓練の開催などを積極的に行っている。まあ言ってみれば、行政と医療機関の外堀を埋めてしまったわけである。

「助産」か「産科学」かと争えば、永久に解決はしない。危機を逆手に取った助産師側の勝利である。お見事としかいいようがない。

（令和4年11月）